

描写表現を取り入れた作文指導の研究

渡邊 洋子・大内 善一

キーワード 描写表現、見ること、子ども俳句

作文教育において「描くこと」の学習は単に描写表現という一表現技法を学ぶことではなく「みること」との関連に注目することにより、生徒の認識の変容を促し、さらにその変容を自覚的にとらえる機会を得る学習の場となるのではないかと考え方にたち研究を行った。内容としては「修学旅行を描く」「俳句物語づくり」の実践及び生徒作品について分析と考察を加えたものである。

I 研究の概要

公立中学校三年生の生徒に対し「修学旅行を描く」「俳句物語づくり」という二つの教材を提示し、実際に描写表現の入った文章を書かせる機会を得た。ここでは、授業の概要説明、書かれた生徒作品とその考察から描写表現の研究を深めることを意図している。

学習者が具体的な部分を丹念に描こうとつとめることは、ある事象を、よりよくみようとする行為につながる。その事象は学習者がよく

みながら選んだことばによって表される。書かれたことばを互いに交流することにより、さらなる認識の変容が生じ、学習者自身、ことばをとおして自己の変容を自覚的にたどることが可能となる。

このように、「描くこと」の学習は単に描写表現という一表現技法を学ぶことだけではなく「みること」との関連に注目することにより、学習者の認識の変容を促し、さらにその変容を自覚的にとらえる機会を得る貴重な学習の場となるのではないだろうか。この点を明らかにすることが本研究のねらいである。

II 授業の実際

一 題材名

「修学旅行を描く」

(一) 対象 第三学年 五月

(二) 育成を目指す言語能力
「自分自身が目でとらえ、感じ取ったことをもとに描写し叙述する能力」

(三) 生徒の実態

書くことに抵抗を感じている男子生徒が多い。女子の多くは書くこ

とについて、学習として努力して取り組んできているが、おもしろいと感ずるところには至っていない。書くことの面白さに気づいていて積極的に書く生徒は五名程度いる。クラス全体として、作文用紙の枚数に抵抗を感じている生徒が多く見られる。

描写の表現を取り入れて書くことに関して、「描写」という言葉を知っている生徒は三人という実態にあり、作文に取り入れて書くことはこれまで学習したことのない生徒たちである。

(四) 指導の内容と題材とのかかわり

三年生になり初めての作文の学習である。飛び込みの三年であり、昨年までの様子はよくわからない状態である。課題点を二つ掲げた。まずは、あまり作文を得意としていない生徒たちにかに抵抗なく書かせるかと言うこと。二つめは、描写の表現をすることは初めてという生徒たちによいように描写の表現を取り入れさせていく工夫をすることである。一つめの課題については、修学旅行という生徒にとって意欲のもてる学習をテーマにすることで、上に見られるような実態を克服していくことができるかと考えた。また、修学旅行の事前にと、帰ってきたところでこのような作品を書くという学習を行うことで、より、意欲的に取り組めるように計画した。二つめの点においては、参考作品を事前に読ませ、このような作品を書こうという意識を持たせた。また、事前学習の折、書きたい場所については意識して、「そのときのおい」「空気」「会話の内容」「手触り」「目に見えるもの」「音」などを丁寧にもるで瞬間密封するようにして覚えてくること、その部分の写真を撮ってくることを意識づけた。事前に準備していくことで、帰ってきてから「何を書いたらいいの?」「よく見てこなかったよ」ということがないように計画した。また、旅行先でも、作文に書く意識で対象を鋭い感覚でとらえ、漠然と見るのとは違う見

方をしてくるよう、事前学習に指導の重点をおいた。

(五) 学習指導の目標

- 修学旅行先で撮影してきた写真をもとに、自分自身が目でとらえ、感じ取ってきたことを思い出し、描写の表現の入った紀行文を書くことができる。

(六) 学習指導の計画と評価計画

○ 指導計画

「書くこと」の領域、二時間の中の四時間の設定である。

- ・一時 事前学習 修学旅行中に「この場所」と思えるところで写真を撮ってくる。その場の「におい」「空気」「会話の内容」「手触り」「目に見えるもの」「音」などを丁寧に覚えてくることの確認。参考作品の提示。

・二時 修学旅行後 構想表の書き込み

- ・三〜四時 修学旅行で印象に残ったところについて描写の表現の入った紀行文を原稿用紙二〜三枚程度に書く。

○ 評価計画

- ・Aの姿 修学旅行先で、撮影してきた写真をもとに、自分自身が目でとらえ、感じ取ってきたことを丁寧に思い出し、描写の表現の入った紀行文として、自分の言葉で豊かに表現できている。

・Cの生徒への手だて

「修学旅行のしおり」を見直し、自分がどんなところへ行き、どんなことを毎日感じていたか思い出す手がかりを与える。修学旅行へ行かなかった生徒にはそれぞれの状況に合わせて別な課題を与える。

(七) 指導の実際

・一時 事前学習では、拡大コピーした写真を使い、何をねらいどの

ような文章を書こうとしているのか提示した。参考作品を読
んで、理解できた生徒が多かった。意欲はもてたが、修学旅
行までに連休が入り十日以上あいてしまったことが旅行先で
の意識づけの点でやや障害となった。

・二時 付箋紙を用意し、思い出した順にどんどんはっていくように

した。その後、さらにふくらめたり削除するなどして三、四
時の書く作業に役立てていた。しかし、付箋を使って構想し
ていく経験は初めてだったらしく付箋をうまく活用できない
生徒が見られた。

・三〜四時 作文を実際に書く時間を充分保証してあげられなかった

ことが一番の課題となった。書きながら思い出す場合も多く、
忘れないようにと付箋を新たに貼り付ける生徒も多数見うけ
られた。どの時間も生徒が非常に熱心に取り組み、写真で書
く作業がおろそかになることもなく進化した。座禅の場面の
ように、写真は無いが非常に印象深かったのでそのことを書
きたいと考えた生徒たちもおり、その生徒たちは写真なしで
丁寧にそのことを思い出しながら書く作業を行うこと
にした。

生徒のワークシート例

「修学旅行を描く」

○描く対象 【 詩仙堂の竹林 】

☆今回はそのときの様子、まわりの雰囲気、そのものの状態

について、画家がキャンパスに描くように文章で描き出す
ことが目的です。

- ・手ざわりは？
- ・音は？
- ・空気は？
- ・そのときの会話は？
- ・目で見た感じは？
- ・写真から気づいたことは？
- ・においは？
- ・それまでの気持ちは？

①書き始めの文

▽修学旅行三日目。修学旅行初日に足を痛め、一日、二日、
何となく過ごしていた。

②展開の部分

- ・ 詩仙堂の竹林が不思議な空間をつくっていた。
- ・ 詩仙堂のあいだからは壮大な林と石段が広がっていた。
- ・ 竹林の中で吹いた風がやけに涼しく感じた。
- ・ 詩仙堂の庭園が異世界のように感じた

(八) 生徒の作品

① 「詩仙の風」

修学旅行も三日目、今日は班行動の日。

何となくだるいような気分だった。初日に右足を痛め、一日目、二
日目と見学にも身が入らずに何となく過ごしているような感じだっ
た。

班行動のためのジャンボタクシーに乗り約三十分程、目的地に到着した。最初の目的地は詩仙堂。自分が自ら行きたい、と意見を出して行くことになった場所だ。

ジャンボタクシーを出て少し歩く。心地よい朝の風と共に静けさがおとづれていた。一、二日目と団体行動での騒がしい見学が続いていたのでこの静けさに少しだけ体が休まった。

門はまるで静けさの世界への入り口だった。少し古ぼけた門の向こうに石段が続く、竹林が広がっている。まさに自分の理想だった。足を踏み入れると風が吹いてきた。ただ、心地よい風、ではなく自分を包み込むような不思議な感じがした。先程のそれとはちがう、体の奥底に、心に響く風。そんな風が吹いていた。

詩仙堂に入ると和風な建物の良さを改めて感じた。畳に木の柱、何よりその空間がとても良かった。庭園の見える部屋に入ってみんなでひと休み。何も言わずにただ座って美しい庭園を見ている、こんな瞬間が何時までも続くといいな、なんて侘びさびに浸っていると、ガイドさんが

「じゃあ中を歩くか。」

と言ったのでびっくりした。

てつきり中は歩けないものかと思っていたのでとてもうれしかった。

庭園に足を踏み入れるとそこは別世界に入ったようだった。白い砂が輝き、緑が広がり、花が咲き誇っていた。見るだけでなく体で庭園の美しさを感じる事ができた。本当にこの世の場所なのか、そんな錯覚に陥るほどに美しい庭園が自分を包んでいた。

やがて詩仙堂の見学が終わりゲートを出て石段の前に立った。下を見下ろすと石段が続く、竹林が揺れていた。綺麗な風景だったな、そんなことを思いつつゆっくりと石段を下りていった。不意に弱く、涼

しい風が竹林を揺らした。その瞬間脳裏に浮かんだのは今までやさしくしてくれた人たちの言葉だった。

二、三秒ぼーっとしていたかもしれない。竹林に、そして吹き抜けた風に心が癒された。

その時を境に少しでも変わろうと努力するようになった。やさしさという風を少しでも人の心に吹かせられるように。

② 「今の自分」

修学旅行三日目、楽しみにしていた班行動を終え楽しかった時間を思い出しつつ、疲れでへばった体を横にする。制服のままなのでくろげないというのと友達の間でも見に行つてやろうという気持ちを交えて私は部屋を後にした。しかし友達ともそんなにふれ合うこともできなかつた。この後、一・二・三組は座禅をするために天竜寺に移動しなければならぬのだ。修学旅行のスケジュールは多忙だった。

バスで天竜寺に移動。移動中私は友達と怖い話をしてきた。修学旅行では定番中の定番である。小学校六年生の修学旅行の時もバスの中で怖い話をしてきた。あの時は怖くて耳をふさいでいた話も今や怖いという事を忘れていたくらいだ。ずいぶん私も冷めたもんだと思う。

天竜寺に到着。気分は浮かなかつた。正直面倒くさかつた。座禅なんかという気持ちだつたのだ。辺りは薄暗く風は冷たくて肌に染みだ。寺に入るとみんなしゃべらなくなり静かになった。ちよつとした緊迫感が肌から感じられた。広い部屋に入りみんなが座る。和尚さんが話を始めた。最初は面倒だという気持ちでいっぱいだったはずなのにいつの間にかそれはなくなり話に、言葉一つ一つに集中していた。耳を傾けて聴いていた。少し足がしびれてきて痛いのに話に集中してあまり気にならなくなっていた。言葉が問い詰めてきた。今の自分はどうかんだ、どうなっているんだと。体に染みいるようだった。座禅に入

る。寺の外の緑を眺めながら考えていた。外はさつきよりも暗くなっているのにもかかわらず、すぐくはつきり目に映っていた。今の自分ってなんなんだろう。もう一人の自分が自分の中で眠っているのならば、それを起こして何か今と違うものが見られるかもしれない。もう一人の自分……。今の自分……。今の目標を成しとげたい。そのために頑張りたい。そう強く思った。思うきっかけをくれた。言葉に感謝した。感動して涙が出そうになるのを押さえるのが一杯一杯で、胸がつまった。座禅が終わり、一人一人が和尚さんに札をする時、私は感謝の気持ちと、最初のめんどうという思いを持っていたことを思い札をした。

外に出ると四・五・六組がもう来ていた。寺に来た時の風は冷たく今はもつと冷たいはずなのに私にはそれが暖かく感じられた。今の気持ちを言葉にして誰かに伝えたいとひしひし思う。帰ったら母にこのことを話そうと思った。

今でもあの和尚さんに感謝している。めんどうになった時、言葉を思い出してもう一人の自分を見つけるために、あきらめないで頑張っている。もう一人の自分を、成しとげるその瞬間を見るために私は今も努力中だ。

(九) 生徒の作品についての考察

「対象をどのように認識し描き出しているか。」

「詩仙の風」

① 「風」に言及している箇所を取り上げると次のようになっていた。

- ・心地よい朝の風と共に静けさが訪れていた。
- ・足を踏み入れると風が吹いてきた。ただ、心地よい風、ではなく自分を包み込むような不思議な感じがした。さきほどのそれとはちがう、体の奥底に、心に響く風。そんな風が吹いていた。
- ・下を見下ろすと石段が続き、竹林がゆれていた。

・不意に弱く、涼しい風が竹林を揺らした。

・竹林に、そして吹き抜けた風に心が癒された。

・やさしさという風を少しでも人の心に吹かせられるように。

この生徒は、最初の部分で「なんとなくだるいような気分だった。」と語るように、重たい気分にも包まれながら詩仙堂を訪れている。そこでまず感じたのが「心地よい朝の風」だったわけである。これが最初に感じた風である。その風は、静けさもそれに手伝い、だるいようだった気分を少し前向きに変えてくれている。「朝の風」を心地よいと感じ、その瞬間を「静けさが訪れていた」と描き出している。心も落ち着き、門をくぐったらまた風が吹いてきている。この生徒は門の中へ足を踏み入れてから感じた風について何度か言い換えをしている。まずは「ただ心地よい風ではなく」これは先程の「心地よい朝の風」を受け、それだけではないものがあることを意識した言葉となっている。そして、「自分を包み込むような不思議な感じがした」という。それは「包み込むような」感じだったのだろう。しかし、意志を持っていない風に包み込むという明確な言葉を使い切るほどはつきりした風でもない。あくまでも自分の感じ方がそうだったのにすぎないことも理解した上で、「ような」とつかい、それだけでは足りないところもあり「不思議な感じ」という言葉を選んでいる。自分が感じ取った微妙な部分を不思議という言葉で逃げて欲しくはないが、この生徒は、むしろ、「不思議」という言葉を遣ったために更に、この風について追求する意志を持ったようにも感じ取れる。今度ははつきり言う。「さきほどのそれとはちがう」、「心地よい朝の風」とは違っていると、「ただ心地よい風ではなく」のいいかえだが、今度は違いをはつきり表す言葉を選び、次に「体の奥底に」といい、それだけでは表しきれず「心に響く風」と表現する。ここにいたって、「不思議な感じ」がただ「不

思議な感じ」で終わらず、なんとか自分の感じた風に最も近い形で表現された満足感がある。そのときの風を一生懸命思い出しながら、自分がその風をどう感じたのか、言葉を選び表そうとしていることがよく分かる。まさしく、自分の感じたものと言葉との間を何回も行き来し、最も近い言い方を見つけ出そうと苦しみ楽しんでいる。「そんな風が吹いていた。」「そんな」は「そのような」のニュアンスにも近く、「この風だった」と決めつけてしまう表現ではなく、「いつてみればそんなふうに表示できる風だった」と言葉にやや幅を持たせた言い方を選んでいく。それが、この時の生徒の感じ方に最も近かったのだろうと感じ取ることが出来る。もし、他の人が同じ風を感じたらもう少し違う表現をしたかもしれないよ。でも僕にはそう感じ取れたんだ。そのような風だよ。そんな思いが「そんな風が吹いていた」から感じ取れる。

「見下ろすと石段が続き、竹林がゆれていた」。ここへきて作者は、自分についてのわだかまりから離れ、対象の中にすっと入り込んでいく。もちろん対象をとらえている自分の目は生きているのであるが、日常の塵や芥にまみれていた自己にからまりついていていた思念がようやくほどけ、対象をとらえる目がいよいよ冴えてきている。その後に来る「不意に弱く、涼しい風が竹林を揺らした」は、弱い風であつてもキャッチできるだけの澄んだ

心になっていくことをうまく言い表している。ここからも、内側に向いていたまなざしが対象へ向かい、視野を広げることが分かる。「竹林がゆれていた」という言い方はその後「竹林を揺らした」に変わる。フラットに戻った自己は不意に流れてきた弱い風に再び活動し始める。だがそれは、自分をさらに高みへ引き上げてくれる想念である。竹林は自分自身でもある。竹林を揺らす弱く涼しい風はもちろ

ん心をも揺らしている。だからこそ、作者にはこの瞬間「今までやさしくしてくれた人たちの言葉」が思い浮かんだのである。本当は風を「弱く」ではなく「やさしく」とあらわしたかったのではないか。しかし、やさしい風が吹いたから「やさしくしてくれた人たちの言葉」を思い出したとするのを嫌ったのではないだろうか。「不意に弱く、涼しい風が竹林を揺らした」。それは、フラットに戻り自己に逡巡することを忘れていた自分をも不意に揺らした涼しい風だったのである。状況や心の動きを何とか言葉で表現しようと、言葉を選ぶための内的な動きがよく見て取れる部分である。これがその後の「竹林に、そして吹き抜けた風に心が癒された。」に結びつく。この場所で自然から与えてもらったすべての風は今、彼の中にそのまま取り込まれていったことがわかる。取り込まれた風はやさしさという一つの風にまとめ上げられて今度は他の人に向かって吹き始めようとしている。それが、「やさしさ」という風を少しでも人の心に吹かせられるように。」という結びの表現となっている。

どんな風か、自分の心にどんな感覚を呼び起こす風か、そこから始まり、同じく風に揺れる対象に自分と同様のものを見、最後には取り込まれていったすべての風がやさしさという風になって他の人を揺らそうとしている。伝えたい内容は中学三年生としたらかなり高次なものと考えられる。それを、あれでは違う、この言い方では表しきれない、と逡巡し、何度も何度も選んだ言葉と自分の感じたものとを比べることによって見事にあらわしている。言葉を選ぶ作業は苦しみを感ずながらも楽しい。完全に言葉で表わしきることはできないけれど、自分の感じたものにより近づけようとする方向性を体得した生徒の成長は早い。文章を書くことに言葉の選び方が鋭くなっていき、本人もそのことに気づき、楽しみながら書く。しだいにそういう生徒は文章

の中で描き方の限界とでもいうものに挑戦するようになる。それはより大胆に描き出すことではない。奇抜さをねらう言い方でもない。そうではなく、より自分の感じたものに近づくように丁寧な自分の感じ取った心と話をしながら選び抜いた言葉で描き出そうとする時、その言葉は独自の世界を背後に背負った輝いた言葉となつて読者に語りかけてくる。力を持った言葉となる。

②「門」に言及している箇所を取り上げると次のようになっていく。

・門はまるで静けさの世界への入り口だった。

・少し古ぼけた門の向こうに石段が続き、竹林が広がっている。

この生徒は、最も印象に残った場所として詩仙堂のこの門を階段から見上げる形で撮ってきている。おそらく、出発間際、タクシーに戻る時に振り向いて撮ったものと考えられる。雑多なもので占められている外界。そこで足を痛め、だるいような気分である作者。外界から逃れたい気持ちにじみ出ている。その雑多な外界とまったく違う世界を構成している詩仙堂内部。その境界となり、一線を分かつのはこの門だ。よけいな修飾はつけていない。「門は」と表現する。「静けさの世界への入り口だった」。彼にとつて、詩仙堂内部はまさしく一つの世界として感じ取れたのだろう。「心地よい朝の風」と共に感じ取った「静けさ」。それは彼にとつてのもう一つのキーワードでもある。雑多なもの、騒音。外界を象徴するこれらのものと対峙する表現として「静けさ」が挙げられている。こういったものを「まるで」を使い直喩で表している。ここでも、書き手であるこの生徒が、自分の感じたものをできるだけ鋭く描き出そうとする、ぎりぎりの表現を求めている姿が浮かび上がる。門とその向こうに広がる対象は、まだ何もものにも染まっていないものたち。それが「石段が続き、竹林が広がっている」という言葉に表れている。門はいかめしい感じではない。

有り難いことに、高くそびえ、自分を寄せ付けないような門でもない。

「少し古ぼけた門」に安心する。一目見て気に入った。だから、門について、できるだけ丁寧な自分の見たもの、感じたものを表そうと言葉を選んでいく。その思いがこの二文に表れている。そして「まさに自分の理想だった」と言う言葉に集約されている。だが門は、そしてこの門の中の世界は、自分を受け入れてくれるのだろうか。作者がどきどきしていたことが感じ取れる。決して敷居の高い門ではない。けれど自分が理想と感ずる門であり入り口であるだけに、果たして受け入れられるのだろうかという期待と不安が門の存在をいよいよ明確にする。「足を踏み入れると」その言葉までこの緊張は高まり続ける。

「足を踏み入れると風が吹いてきた」。緊張は一気に解決され、受け入れられたことが明らかとなる。その思いは「包み込むような」にながる。「自分から希望して来ることに決めたこの詩仙堂は、はたして、自分を受け入れてくれるのだろうか」。その思いは門への緊張を高めることとなり、この二文のような表し方として結実した。そして、自分を「包み込むような不思議な感じ」といういい表し方をもたらすのである。

③「庭園」に言及している箇所を取り上げると次のようになっていく。

・庭園の見える部屋に入ってみんなでひと休み。

・何も言わずにただ座って美しい庭園を見ている、こんな瞬間がいつまでも続くといいなあ、なんて侘びさびに浸っているとガイドさんが「じゃあ、中を歩くか。」と言ったのでびっくりした。

・てつきり中は歩けないものと思っていたのでともうれしかった。

・庭園に足を踏み入れるとそこは別世界に入ったようだった。

・白い砂が輝き、緑が広がり、花が咲き誇っていた。

・見るだけでなく体で庭園の美しさを感じることができた。

・本当にこの世の場所なのか、そんな錯覚に陥るほどに美しい庭園が自分を包んでいた。

「静けさ」という言葉に表される世界からまたもう一つ「別の世界」を庭園に感じていることがわかる。色とりどりで、門から室内までとは違う、生き生きとした生命感のみなざる美しい世界。その感覚の違いを「別世界に入ったよう」という言葉で表現している。

「白い砂が輝き、緑が広がり、花が咲き誇っていた」。詩仙堂に実際行ってみると、室内から見た庭園と実際に庭園を歩く時では大きな違いを感じる。かれはその違いをこのような描写で表している。その違いは「静けさ」と対比して考えると一層鮮明になる。「白い砂が輝き、緑が広がり、花が咲き誇っていた」。枯れたわびやさびの雰囲気になり、深い精神性に耽溺した彼にとつて、その違いは目にも心にも突き刺さるように強いものを感じたに違いない。溢れんばかりの生命力。それらが「輝き」「広がり」「咲き誇っていた」という言葉を選ばしている。あの感じた違いをどう表現しよう。つねに、自分の受けた感覚に立ち返り、表現を選んでいくことがわかる。その先にある「美しい庭園が自分を包んでいた」もその延長での表現である。擬人法で述べたくなるほど、やさしさと温かさと豊かさ等を一度に感じたものである。やはりここでも、あの時のあの感覚をどんな言葉で表現していけば、自分の感じている状態が一番近いだろうと、自分の感覚と言葉との間を何度も行き来している様子が見て取れる。風の「包み込むような」感じはここで、「美しい庭園が自分を包んでいた」と言う断定の言い方に変わる。門のところを感じた葛藤が解決したことがわかる。作者自身はこれら二つの言葉のかかわりに無意識であるからこそおもしろみが増す。感じたことをできるだけそれに近い言葉で表そうとした結果生まれた作品のおもしろみである。

二「今の自分」

①座禅に対しての自分の気持ちと座禅をしながら考えたことに言及している箇所を取り上げると次のようになっている。

- ・気分は浮かなかつた。
- ・正直めんどくさかつた。
- ・座禅なんかという気持ちだったのだ。
- ・辺りは薄暗く風は冷たくて肌に染みた。
- ・ちよつとした緊張感が肌から感じられた。
- ・最初は面倒だという気持ちでいっぱいだったはずなのにいつのまにかそれはなくなり話に、言葉一つ一つに集中していた。
- ・耳をかたむけて聴いていた。
- ・少し足がしびれてきて痛いのに話に集中してあまり気にならなくなっていた。
- ・言葉が問いつめてきた。
- ・今の自分はどうなんだ、どうなっているんだと。
- ・体に染み入るようだった。
- ・外はさつきよりも暗くなっているのにもかかわらず、すぐはつきり目に映っていた。
- ・今の自分でなんなんだろう。
- ・もう一人の自分が自分の中に眠っているのなら、それを起こして何か今までと違うものが見られるかもしれない。
- ・もう一人の自分……。
- ・今の自分……。
- ・今の目標を成し遂げたい。
- ・そう強く思った。
- ・思うきっかけをくれた、言葉に感謝した。

・感動して涙が出そうになるのを抑えるのが一杯一杯で、感謝と感動と気づけた喜び、嬉しさで一杯で、胸がつまった。

・座禅が終わり、一人一人が和尚さんに礼をする時、私は感謝の気持ちと、最初のめんどうという思いを持っていたことを思い礼をした。

・寺に来た時の風は冷たく、今はもつと冷たいはずなのに私にはそれが暖かく感じられた。

・今の気持ちを言葉にして誰かに伝えたいとひしひし思う。

・今でもあの和尚さんには感謝している。

・めげそうになった時、言葉を思い出して、もう一人の自分を見つめるために、あきらめないで頑張っている。

・もう一人の自分を、成しとげるその瞬間を見るために私は今も努力中だ。

内面の、見えない心の動きが言葉となって表れている。この作者の書いている内容のほとんどが内面の動きである。それが五感を使った言葉でよく表されている。例えば「ちよつとした緊張感が肌から感じられた」という言い方をする。「足がしびれてきて痛いのに話に集中してあまり気にならなくなった」。話に引き込まれ夢中で聞いている様子が読み手にも伝わってくる。時にそれは会話に近い描き方にもなっている。「言葉が問いつめてきた。今の自分はどうかんだ、どうなっているんだ」と心のつぶやきもある。「今の自分てなんなんだろう」。自分の内面の動きを丁寧に追い、できるだけそのときの自分の気持ちに忠実な言葉で表そうと努力している。それがこの作者独自の描き出し方をもたらしている。「外はさつきよりも暗くなっているのにもかかわらず、すぐくはつきり目に映っていた」「寺に来た時の風は冷たく、今はもつと冷たいはずなのに私にはそれが暖かく感じられた」。非常にもしろい描き方である。「めんどうくさい」と思いながら入

ってきた時よりも、外は確実に暗くなってきた。それにもかかわらず今は鮮明にものが見えている。いや、目に映っていたという。このやや突き放した言い方に自己をやや離れたところから見る作者の目も感じることができる。目に映るものの輪郭がすぐくはつきり見えるとは自分の心の風景もまた輪郭がすぐくはつきりしてきたことを物語っている。視覚でとらえた直前との見え方の違い。微妙で見落としてしまいそうな部分が、見ることによってとどめられている様子がよく表れている。そこに心の動きを重ねているところがこの作品のおもしろみとなっている。お坊さんの言葉は自分を動かすほどの力を持っていた。心のエネルギーが充たされたこの作者は、頑張ろうという気持ちで一杯になっている。それが肌にあたる風の温かさとして描き出される。「今はもつと冷たいはずなのに私にはそれが暖かく感じられた」。見えないものが、目に見えるかのように、手で触れられるもののように描かれている。この言葉の使い方もまた、何とか自分の感じていることを感じているように言葉にしようとするひたむきな思いと、五感を使ってできるだけキャッチしようとする、次第にとぎすまされていった感覚によって作り出されたものである。

二 題材名

「俳句物語づくり」

(一) 対象 第三学年 六月

(二) 育成を目指す言語能力

「提示された俳句の表現に即し想像したことを描写し叙述する能力」

(三) 生徒の実態

修学旅行の随筆では、非常に熱心に取り組み、取材してきたことを

文章の中に取り込むことはほとんどの生徒ができていた。しかし、初めての学習であったので、立ち止まって物事をよく見たり感じ取ったりする学習と、対象を具体的に描き出す学習のどちらも十分に定着したとはいえない実態である。

また、書ける生徒たちは、だれにでも書けそうな模範的な文章を書こうとする傾向が強い。したがって、その力を尊重した上で、自分に引きつけて具体的に想像した事柄を読み手に効果的に伝える学習を行うことが望まれる。

(四) 指導の内容と題材とのかかわり

三年になり修学旅行の紀行文を書いている。その際、「目で見たこと」「耳で聞き取ったこと」「触れて感じたこと」「におい」「会話の内容」「その場の空気」などを現地で意識的に取材し、帰校してから具体的に細かく思い出し、作品の中に取り入れて描いていく学習を行った。立ち止まって物事をよく見たり、感じ取ったりする学習と、それを文章の中で具体的に描き出す学習の同時進行であった。

今回はこの学習の上に立ち、過去に経験した多くの事柄の中から言葉を選び起こし、描くことがねらいである。選んだ俳句について場面や状況を想像し、描写し叙述する。この作業では、まず表現に即して俳句を読み取る力が試されることになる。そのハードルを低くするため、今回は子ども俳句を使って、たやすく内容が読み取れる工夫を行っている。次に、定型韻文の中に盛り込まれた世界をどれだけ具体的に自分に引きつけて想像できるかという、想像力を鍛える場としての学習が盛り込まれている。それは、自分の中でふくらんだイメージを言語化する学習とも密接に関わってくる。理解しやすい俳句を提示しているが、受け止める生徒は中学三年生であり、中学三年生らしい読み取りになると考えられる。書かれる文章は、その生徒にとって表現

できるぎりぎりの世界である。自分のもったイメージを伝えるために、言葉を探し、表現を取捨選択する学習を行うことが今回の学習の中心である。

(五) 学習指導の目標

○ 提示された俳句の中から一つ選び、俳句の表現に即して想像した物語を、描写をまじえて書くことができる。

(六) 学習指導の計画と評価計画

○ 指導計画

「書くこと」の領域、二時間の中の一時間の設定である。前回、修学旅行の紀行文の学習を四時間行ってきた。今回はその学習の一層の定着をはかり、発展させるための学習時間である。

○ 評価計画

・ Aの姿 提示された俳句の中から一つ選び、俳句の表現に即して豊かに想像した物語を、描写をまじえて、読み手に効果的に伝わるように書くことができる。

・ Cの生徒への手だて

提示された俳句の中から一つ選ぶことのできない生徒に対しては、机間巡視の折、俳句の意味が分からないためか、迷ってしまうためかを見極め、俳句の意味の分からない時には、意味の説明を行い、迷っている場合にはその生徒の生活感から理解しやすい俳句を取り上げ、想像をふくらます手助けを行う。

俳句の表現に即して想像できない生徒に対しては、その俳句の説明を行い、自分の想像を広げられるよう物語の続きを質問するなどの助言をする。

俳句の説明だけになり、描写の入らない生徒に対しては、

考	三分	止める	受け止める	過程	学習
①「俳句集」のシートに目を通す。 二、物語作りを行う。			一、提示された俳句の中から一つ選び、物語を書くことを知る。	学習活動	
①「俳句集」のシートを配布する。 二、物語作り			一、提示した俳句をもとにして物語を作ることを説明する。	指導上の留意点	
				備考	

- (七) 本時の展開
- ① 日時 平成十七年六月
 - ② 対象 中学校三年
 - ③ 場所 教室
 - ④ 目標 提示された俳句の中から一つ選び、俳句の表現に即して想像した物語を、描写をまじえて書くことができる。
 - ⑤ 評価の具体・・・六を参照
 - ⑥ 展開

「そこではどんな音がしているのか」「どんな空の色なのか」「どんな会話をしたのか」などを聞き、文章の中に書き入れるようアドバイスを行う。
評価の観点・・・①課題に一生懸命取り組んでいたか。
(学習状況の観察)

一・	る	か	分	・	る	め	か	確	五分	三十	る	え	
								三、豊かに想像して表現することの楽しさを味わいながら友人の作った作品を聴く。 ・会話表現を取り入れたり、その場の雰囲気や音などが入ると読み手にイメージが伝わりやすいことに気づく。 四、次の学習で行う和歌物語づくりへの心構えをする。			④描写を取り入れた文章を書くことを知る。 ⑤どの俳句について物語を書くか決める。 ⑥物語づくりを行う。		②一つ一つの俳句について、簡単に情景を思い浮かべる。 ③サンプルを参考にして豊かに想像して文章にすることを知る。
								三、その作品のどこがよいのかを明らかにしながら紹介する。			④描写の表現を入れて書くことを説明する。 ⑤俳句物語づくりのワークシートを配布する。 ⑥机間巡視を行い、必要な生徒に指導を行っていく。 (ワークシートへの記入状況を見て、時間配分など助言を行う。)		②一つひとつの俳句について簡単に説明をする。 ③サンプルを提示し、豊かに想像して文章にすることを説明する。
												(課題) に取り 組む姿 勢を観 察・指 導す る	

二分

(8) ワークシート・サンプル

俳句集 (ワークシート)

三年「」組 氏名「」

スポーツ編

- ① 秋晴れやバットにグローブさしていく
 - ② 満天の星を相手に竹刀振る
 - ③ セミ時雨野球はすでに九回裏
 - ④ 暑い夏ラケットの中に友がいる
 - ⑤ ボール一つサッカーゴールに残る秋
 - ⑥ 秋空にとどけと高くキックする
 - ⑦ 夕焼けのミットにびしつと父のたま
 - ⑧ 空ぶりのバットのむこうにいわし雲
- 生活編
- ⑨ 向日葵のうしろ向きあり反抗期
 - ⑩ サイダーの泡(ことごとく)反抗期
 - ⑪ 七夕や去年とちがう願い事
 - ⑫ ほんとうの願いは書かず星祭
 - ⑬ ちゅうしゃしてねているそばでむしがなく
 - ⑭ 父さんのたいいんはまだ秋の雨
 - ⑮ 母とふたりにゆういんちゅうの月見かな
 - ⑯ 天国はもう秋ですかお父さん

- ⑰ あきばれやぼくのおりづるとびたがる
- ⑱ おとうこのうまれたへやにほたるかこ
- ⑲ ごくくと風をのみこむ鯉のぼり
- ⑳ 夕焼けを少しぬすんで窓ガラス

〔注(1)〕

俳句物語づくり ワークシート

三年「」組「」番 氏名「」

サンプル

▽夕食後、いつもは黙ってお風呂に入ってしまった父親が、今日はなぜか新聞を見ながらそのままお茶を飲んでいる。新聞紙をたたみながらぼそっと言った。

「蛍を、見に行くか？」

圭太は、妹の亜紀と顔を見合わせた。蛍？

「行く！」

明かりが一つもない、真つ暗な土手。黒々とした川の流れが丈の高い草の間に見え隠れしている。ザーザー流れる川の音と虫の鳴く音が三人を包んだ。

「おとうさん、蛍なんて……。」

「!!!」

「あーっ!!」

おとうとの
うまれた
へやに
ほたるかご

足下からふわつと緑色がかった蛍光色のような光が立ちのぼり、川のほとりの草の中に消えた。

「もう一回！もう一回！」

「あつ！」

今度は亜紀がさげんだ。光がすうつと消えていく。

「そうつとしててごらん。」

父親がやや離れた場所でささやいた。

夜露に服がしつとりと濡れている。川霧が水の

流れとともに動いていく。蛍の光が見えたのか、

目の錯覚だったのかわからなくなるようなめまい。あっちの草かげ、こっちの草かげと、同時に

何カ所もが呼吸するように光を発している。

「亜紀、手をだしてごらん。」

父親の柔らかい声が遠くでする。

「何？」

「そうつと、手の中に持っていけるかい？」

父親が渡したのは、一匹の蛍だった。

ようやく家についた。母親が虫カゴをさがしてく

くれた。圭太には見覚えのある虫かごだった。

「どうするの？」

「しー。」

口元へ指を立てる仕草をする。母親はそのまま、生まれて三ヶ月の弟の部屋へ虫かごを持って行っ

た。明かりを消したままの弟の部屋で息を潜める。ふわあ、ふわあ、と部屋が大きくなったり小さくなったりする。ふわあ、ふわあ。いつしか、光が弟の寝息と重なってくる。まるで弟のかけてる魔法みたいな部屋全体が大きな蛍となって輝きだした。

△

(八) 生徒作品

俳句物語づくり ワークシート

三年「」組「」番 氏名「」

▽中学校に入学し、だいぶ慣れたようで慣れていない、中途半端な時期の五月。重い鞆をかついで、僕は家に着いた。「おかえり」という声はない。今日は部活がなく、早く帰ってきたが、なぜかとても疲れていた。先輩や新しくできた友達いる学校生活は、気を遣うからだろうか。

着がえる気力もなく、制服のまま、縁側に座った。誰もいない家は、とても静かで、ゆっくりするには、とてもよかった。

今の季節には珍しい、暑い日差しが照りつけた。「やる気が失せる」

日差しのせいにしてしようとしたが、実際はちがっ

ごくごくくと
風を
のみこむ

鯉のぼり

た。人間関係で参っているのだ。
ふと頭を上げると、塀を飛びこえて、隣の家が見えた。そこには、鯉のぼりが出ていた。そういえば、最近じゃ、うちは出してないなと思ったが、べつにどうでもよかった。その鯉のぼりは、風がないため垂れていた。まるで自分のようで嫌になつた。

なおさら落ち込み、僕は、寝ころがった。手の上にあげると畳の手触りが気持ちよかった。あまり経たずに、僕は眠りに落ちた…。

強風がふき、目が覚めた。体を上げ、座ってみると、風をうけてパンパンに張った鯉のぼりが靡いていた。僕を上げましてくれているのかな。そう思うと、やる気がわいてきた。
△

俳句物語づくり ワークシート

三年「」組「」番 氏名「」

▽かなり冷え込んだ夜。空は澄んでいて、満天の星が出ている。風が吹きあれ、あたりの草をさらっていかうとしている。そんな広い草原に、竹刀を持ち、ただ一人たたずんでいる人物があった。

満天の
星を相手に
竹刀振る

遅い時間で、しかも都会からはずれた場所のため、風の音しかしない。

目の前の何もない空間へと、竹刀をかまえる。ゆっくりと目を閉じ、精神を集中させてから、勢いよくそれを振り出す。

「……っ。」

寒さで手がかじかんで、鈍い痛みが走る。それでもかまわずに振り続けた。

竹刀をおろし、草原の上にどさりと座る。

「はあ、はあ……。」

長い間振り続けていたことに加え、寒い中それを行っていたため、激しい息切れがする。しかし、数分休んだだけで立ち上がり、また素振りを始めた。

ただ素振りをやればいいというわけでもないが、それでもこうせずにはいられなかった。

(こんなんじや、全然みんなの期待になんか応えられない。だから、もっと頑張らないと……。)

風はあいかわらず吹いている。満天の星空の中、ただひたすら竹刀を振り続ける。

夜はまだ明けそうになかった。
△

III 考察

「修学旅行を描く」では、初めての学習が多く、とまどいも見られた。今までは何か違うことをやるらしいけれど、何をしたらいいのか、難しそうという感想も聞かれた。参考作品を紹介することでそういった思いも消えていったようである。授業自体はスムーズに進み、苦手意識が先に立って筆を持たないという姿は見られなかった。描写については、「自分の目で見ると」ということができた生徒、それを言葉に何とか置き換えられた生徒、スムーズな筆運びでうまく文章のなかに取り込めた生徒と様々な段階があることが、それぞれの作品からわかった。書きながら指導するこちら側と話すなかで、自分がどのようなことに心を奪われ感動するのか、他の人とは違う自分の感性を改めて認識した生徒も多い。課題点は作文を書く時間の配分、三時間は保証してあげたかったと言う点と、描写の表現についてせめて読むことの中で取り上げ、その効果も十分に理解された上でこの授業を仕組みたかったということである。生徒にはその分ハードルが高くなったと感じている。

自分の目で、自分の感性で捉えてきたことを文章にすることにより、独自の視点、独自の感じ方を披瀝する作品が多くあり、指導するこちらが驚いた。これらの文章を、生徒全体に還元し、二学期に書く予定になっている説明的な文章に生かしていきたいと考えている。

「俳句物語づくり」を行って、文章を書くことに対し、自分自身が見方を変えた部分がある。それまでは文章を書くことは苦しいことだが自分のためになることが多いと考えて書いていたが、俳句物語をつくることによって書くこと自体が非常に楽しい行為であるということを感じてきた。生徒もそのことを肌で感じたらしく、もっと書きたいと二枚提出した生徒もいる。また、次もやらないのとも聞かれた。提

出していく生徒ごとに、「変な文章だから気にしないで」「先生、ちゃんと読まないで」などといいながら、読んでほしくてたまらないといった表情を見せていた。廊下で会っても、先生、なかなかいい話だったでしょと男子がさりげなく聞いてくる、しばらくはそういう日々を過ごした。

書くことの意欲を図ることはできるのだと、この実践での生徒の反応を見て率直に感じた。描写については、生徒の作品を見ると、さらっと取り入れているものが多い。しかし、修学旅行の時のものと違い、空想している分だけ、ありきたりな言葉から抜け出せていない（自分の目がまだ生かされていない）文章も見られた。描写とはこういうことであると理屈から入ろうとしても大人でさえ難しい。しかし、参考の作品を読むことで、こういう表現を入れるのかと感じることができた生徒が多かった。まだ、十分な描写表現になっていない生徒も多いが、自分の見たこと・感じたこと、そのときの会話、音などを言葉にしていこうとする試みは文章の中に生まれている。

読むこととの連携、さらに書くことの中で、ただ描写の表現を使った文章が書けることを目指すので終わってはいけなさと考えている。そういう繰り返しによって、漠然と見ていたものを鋭くとらえるようになること、自分が何を対象として選んでいく人間なのか気づくようになること、この言葉では表し切れていないと感じ、とらえた対象と言葉の間を何度も往復させる経験をしていくこと、そうすることによって、最終的にはものの見方や自分の言葉の感覚が鋭くなってきたことに気づける書き手になっていってほしいと願っている。まだまだ、入り口に立ったばかりの実践であるが、生徒の反応に勇気づけられている。

修学旅行の紀行文では、見たもの、耳で聞き取ったこと、感じたこ

と、匂い、会話、その場の雰囲気などをできるだけ丁寧に描き出すことで、ものを見方を磨き、言葉と自分の感じ取った対象との距離を縮めていくために何度もその間を行き来することに主眼をおいた。そういった中から独自のものの見方、描き出し方が生まれてきていた。それは描写表現をしていくための一つの方法であると感じている。しかし、実際に自分が見てきたことであり、感じてきたものであるため、対象を語るときに自分と切り離すことが難しくなることが生徒の作品からわかった。描写的な表現は随所にあるものの、語尾で自分とつながっている文も多かった。

それを踏まえ「俳句物語づくり」では、描写表現のあるサンプルを参考に生徒が俳句の物語をつくった。その過程で、それほど意識しなくても生徒が描写の表現をすることも確認できた。修学旅行の紀行文を書いてからこの学習を行ったことで、両者の描き出し方の傾向がより鮮明になった。「俳句物語づくり」は虚構であるため、紀行文の時のように、対象と言葉とまるで火花が飛びようなぎりのせめぎ合いの中で生まれた描写とは性質が違うということである。「良くこんな場面があるものでしょう」といった挿絵風といったらいだろうか。万人が理解するおさまりの描き方も目についた。

しかし、それが弊害として後まで残るものではないと考えている。まるで小説の一場面を描くようなつもりで書いたとしても、それはかつて日常生活の中のかなんらかの状態で経験したことを手がかりにしている。自分の中のかげらには違いないのだ。したがって、今回の授業では、「サンプルを参考にして」という点のみを強調していたが、描きたいその場面に使う自分の経験をじっくり思い出し、見つめ直しながら、細部を描き出していこうという方向性を持つことによって、もの見方、言葉の遣い方が鋭くなっていくことが期待できる。虚構で

あるが故に自分から離れ、つき放した表し方ができる。それは紀行文に比べはるかにやりやすいようである。その取り入れやすさを生かしながら、さらに描き出し方を磨いていく方向性を持つことが重要であることが今回の実践から確認できた。描写の表現に迫る二種類の実践はそれぞれの足りない部分を補う要素を持ち合わせていたことが生徒の作品から浮き彫りとなった。

注

- (1) 金子兜太監修『子ども俳句歳時記』（蝸牛社、一九九七年七月）